からしだね

2019年12月号
(555号)

キリストの受難 カトリック池田教会
主任：ノノイ・プラザ神父
住所： 〒563-0041　池田市満寿美町9－26
TEL ： 072-751-2400　FAX：072-753-4624
URL(ホームページ)：http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm

本号の記事の主題など

ノノイ･プラザ神父の巻頭言
「マラナタ」
表紙の絵について
MARANATHA!　Fr. Nonoy Plaza
大人の日曜学校だより
10･12の教会樹木剪定作業の報告
みんなの談話室
「十字架の使徒」を読む
短歌
新たにゆるしの秘跡が12月に
年間カレンダーに追加･変更された行事予定
広報委員会からのお知らせ

巻　頭　言

マラナタ

ノノイ・プラザ 神父

ことしはアドベントの初日がたまたま師走最初の日とかさなってます。おかげでアドベントがすこし短くなりました。好むと好まざるとにかかわらず、クリスマスは２５日にやってきますから、主の到来に備えるために与えられた時間はご降誕までの２４日間ということになりますね。

そうです、主の道をととのえる必要があります。このことをわたしたちがアドベントのあいだ、いつも思いだすのは洗礼者ヨハネのおなじみの呼びかけのおかげです。ゆがんだ道をまっすぐにし、言ってみれば丘や山を平らにならすのです。アドベントリース（花輪）やご降誕の場面を据えつけるといった教会での準備もそうですが、もっと大事な準備をもちろん心のなかでしないといけない。

そのこともあって、どなたかを毎年うちの教会にお招きして追憶を呼び覚まし黙想モードにみちびいてくださるよう、時間をとっています。ことしは箕面教会の主任司祭矢野神父さまにおいでいただけることになりました。矢野神父さまのタイムリーで適切な分かちあいと「ゆるしの秘跡」にあずかるわたしたちは、救い主のご誕生を楽しみに心まちするなかで感動がおとずれ、精神が高揚してゆくでしょう。

アドベントがそなえるこうしたよろこびを強調するのは、大事なことだとおもいます。じっさい、これこそが四旬節遵守とは異なる特徴だからです。基本的に四旬節は「懺悔」（ざんげ）ですから、アドベントがもたらすよろこびとは対照的です。フランシスコ教皇が日本にはじめておいでになるというニュースを聞いたときより、おそらくもっともっとわくわくしながら、わたしたちは主がおいでになるのを待ちうけます。

こうした態度をわたしたちは初期のクリスチャンから受けついだのです。この人たちこそが、主イエスが再来されるのを張りつめた思いで待ちうけることを、わたしたちに示してくれたのですから。なるべく早く主に会いたいという心からの深い思いをよく表現しているのが「マラナタ」という言葉です。これを口にする―「イエスさま、来てください。どうかおいでください。遅れないで！」―のがどういうことか、わたしたちに示してくれたのは初期のクリスチャンなのです。

おもしろいことに新約でマラナタという言葉が出てくるのは、じつは一度しかないことに注意しておきましょう。「コリント人への手紙（一）」16章２２節の最後の言葉なのです。アラム語からギリシャ語に音訳（翻訳とはちがう）されたと言われ、どんな音らしいかローマ字でかくと「moran-eto」（モラネト）だったというのですが、じっさいの意味は「わが主がおいでになった」です。

マラナタという言葉を『新アメリカ聖書』の註釈はこんな風にみじかく解説してます―「マラナサ（Marana_tha）：アラム語表現、おそらく初期キリスト教典礼でもちいられた。「おお主よ、来てください」（“O Lord, come!”）というところでわかるが、マラナタはキリストがはやく戻ってくれることへの祈り。アラム語の言葉の区切りをかえると（Maran_atha）「マラン_アサ」（“Our Lord has come” 主がおいでになった）となり、これは信仰宣言（熟達した信仰）となる。前者（つまり最初）の解釈は、この熱心な歓迎の言葉とおなじ意味とおもわれるギリシャ語表現に採用（つまり『ヨハネ黙示録』２２章２０節「アーメン、主イエスよ来てください」）されている。

２０節全体はこんな風です―「これらのことを証しする方が、こう仰せになる、そう「わたしはすぐに来る」アーメン、主イエスよ、来てください」そして註がさらに言うには、マラナサというのは「アラム語の表現マラナ_サ」に類似した典礼での繰り返し言

葉・・・―この「マラナ_サ　わたしたちの主、来てください」というのは再臨時、キリストが栄光のうちにやって来ることへの祈りだった」と。

「マラナ_サ」と発音しようが、「マラン_アサ」と発音しようが、いまのわれわれにすれば目をむくような違いではない。けっきょく、どちらの意味もアドベントやクリスマスにわたしたちが守りお祝いすることが真実であるのを言いあらわし、包み込んでいるから。

さきに旅だっていったすべてのクリスチャンが伝えてきたこと、つまり約束どおりわたしたちの主キリストが再来することを待ち望むその思いを、わたしたちはアドベントのあいだ、かれらといっしょに分かちあうのですから。けれど、クリスマスになるとキリストの誕生されたことを、主がおいでになったことを、言葉が肉となりわたしたちのうちにおられることを、ヨハネが福音書の冒頭で美しく語ったようにわたしたちは思いおこすのです。

修道僧で神学者、中世初頭西欧に修道生活の思想と実践をもたらしたさいの役割でよく知られる聖ジョン・カシアン（AD360 － 435頃）、それに1960～70年代にかけて有名なベネディクト派修道僧だったジョン・ダグラス・メインは黙想するとき祈りの言葉として「マラナタ」を（いわばマントラとして）もちいることを推奨しました。

リズミカルに「マラナタ」を口にしていると、主イエスご自身が語られていた言葉アラム語でしゃべられていた古代キリスト教の言葉を使うことになるばかりか、じぶんたちの心と精神が静寂にたつし、よりふかい神との出会いへと自分自身を開いてゆく手助けともなります。

よろこばしい期待にみちたこの季節、「マ・ラ・ナ・タ」と祈るようにわたしたちが口にするとき、主が暮らしのなかにいつなんどきおいでになってもいいように、主へのそなえができますように。そうすることで、主のご降誕をわたしたちがよころびにあふれて意義深く祝うことができますように。

みなさまに「メリークリスマス」、すばらしい新年をお祈りします。

表紙の絵について

ジョット・ディ・ボンドーネが1305年に描いたフレスコ絵画で、ご降誕の場面である。左端の聖母マリアの顔へ視線が向かうように、人物や動物や天使たちが周囲に配置されている。イタリアのヴェネツィアに近い小都市パドヴァに、当時の有力者が建てたスクロヴェーニ礼拝堂があり、その壁面に描かれた聖画の一枚だ。

何年か前、スクロヴェーニ礼拝堂を訪れた。小さな礼拝堂なので、入堂するためにはネット予約をしなければならない。パドヴァの駅を降り、ぶらぶら歩いていくと公園の中に礼拝堂があった。礼拝堂へ入ると、そこは青色に包まれた世界だった。聖母マリアとイエス・キリストの生涯を中心とする、さまざまなフレスコ画が壁面を埋め尽くしている。左右の壁に４０枚近くの聖画が上中下の三段になって描かれていた。アーチ型の天井は金色の星が光る青い空だ。それぞれの絵の背景も青い。一枚ずつ見入っているうちに、たちまち定められた20分が過ぎ、退室しなければならなくなった。心残りがして、忘れがたい経験となった。

何世紀にもわたって、さまざまな画家が精魂込めてご降誕を描いてきた。これもその中の優れた一枚である。クリスマスおめでとうございます。

（Y.N.）

Wikimedia Commons　Photo by Jose Luiz

The heading article

MARANATHA!

Fr. Nonoy Plaza

The first day of Advent falls on the very first day of December. That makes the season of Advent a little bit shorter this year. And whether we like it or not, Christmas will always begin on the twenty fifth. And so, the twenty four days before the Lord's birth are all we have to prepare for his "coming."

Yes, we need to prepare the way of the Lord. The ever-familiar call of John the Baptist during Advent constantly remind us of this. We need to make straight crooked paths and flatten hills and mountains, so to speak. And although we do make some physical preparations in the church such as the setting up of Advent wreath and the Nativity scene, the more important preparation of course is in the realm of the spirit.

Because of this, every year we do set aside times for recollections by inviting someone to lead us into a meditative mode. We were so privileged to have the parish priest of Minooh, Fr Yano, to lead us this year. Through his timely and relevant sharings, together with our availing of the sacrament of penance, our hearts were touched and our spirits were lifted up as we look forward to our celebration of Christ's birth with eager longing; or with joyful expectation and patient waiting for the coming of the much-awaited Messiah.

I think it is important to stress the joyfulness of this season. In fact it is this aspect that makes it different from our observances of Lent. Lent is basically penitential, in contrast to the joyfulness that Advent brings. We excitedly wait for the Lord's appearance, much much more perhaps than the excitement we felt when we heard for the first time the news of Pope Francis' visit to Japan. We inherited this same attitude from the early Christians. They were the ones who originally showed us that intense longing for the Lord Jesus to come again. And the word 'Maranatha' aptly captures their hearts' deep desire to meet the Lord the soonest possible. They showed us what it means to say: Jesus, Come! Please come! Don't delay!

It is interesting to note that the word Maranatha only appears once in the New Testament. And it is found as the last word of verse 22, chapter 16 of St. Paul's first letter to the Corinthians. It was said to be a transliteration (which is different from translation) of an Aramaic word into Greek that sounded like 'moran-eto' when romanized but which means "our lord has come."

A footnote found in The New American Bible explains briefly this word in this way: "Marana_tha: an Aramaic expression, probably used in the early Christian liturgy. As understood here ("O Lord, come!"), it is a prayer for the early return of Christ. If the Aramaic words are divided differently (Maran_atha, "Our Lord has come"), it becomes a credal declaration (a professional faith). The former (that is, the first) interpretation is supported by what appears to be a Greek equivalent of this acclamation in Rev 22:20 "Amen. Come, Lord Jesus!"

The full verse 20 goes like this: "The one who gives this testimony says, "Yes, I am coming soon." Amen! Come, Lord Jesus!" And the footnote further says that Maranatha is a "liturgical refrain, similar to the Aramaic expression Marana tha—"Our Lord, come!" ... It was a prayer for the coming of Christ in glory at the parousia."

For us now, whether it be pronounced as "Marana_tha" or "Maran_atha" it doesn't really make a glaring difference. After all, both senses still express or contain the truth of what we are observing and celebrating during these days of Advent and Chritmas.

For indeed at Advent we share the same longing that all the Christians who have gone ahead of us expressed, namely, a

longing for our Lord Jesus to come again as he promised. But at Christmas we recall the birth of Christ, he has come, the Word became flesh and dwelt among us, as John beautifully said at the beginning of his Gospel.

St John Cassian who was a monk and a theologian and who was noted for his role in bringing the ideas and practices of monastic living in there early medieval West, as well as the popular Benedictine monk, John Douglas Main in the 1960's and 70's recommended the use of Maranatha as a prayer phrase, a mantra so to speak, during meditations.

When we say it in a rythmic way, we not only use an ancient Christian word spoken in Aramaic, the language our Lord Jesus himself spoke, but that it will help or heart and mind to arrive at stillness and this open ourselves more to a deeper encounter with the Divine.

May this season of joyful waiting, as we prayerfully say, MA..RA..NA.. THA, truly prepare us for his unexpected coming into our lives. And may this lead us to a joyful and meaningful celebration of the Lord's birth.

WISHING YOU ALL THEN A MERRY CHRISTMAS AND A BLESSED NEW YEAR!

大人の日曜学校だより　10月27日

「へりくだる者は高められる」　ルカ18･9－14

前回、福音の内容がわかりにくいと神父様にも解説をお願いした旨、報告しましたが、今回は一転「わかりやすい」と参加した一同も安堵した様子でした。それは、自分は正しいとうぬぼれて、他人を見下している人々を、イエス様がお咎めになったことが主題というのも理由のようです。そして、その中身は次のようなたとえ話によるものでした。

あるところに品行方正なファリサイ派の人と、もうひとりは徴税人の人がいました。ファリサイ派の人は自分の身の上、行いについて立派なことを言うのですが、徴税人のほうは、胸を打ちながら「神様、罪びとの私を憐れんでください」といって、目を天に上げようともしません。そこでイエス様は「義とされたのはこの（徴税人の）人であって」、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と、そう諭されます。もうひとつ皆が安堵したのは、「自分は正しい」と得意になっている人が懲らしめられるという、そんなシンプルなストーリーだからでしょう。その上で、私はここでもう少し、現代の視点でこのことを考えてみたいと思います。

まず、この登場人物のファリサイ派の人は自己評価の高い人です。そして一方、徴税人の人は逆に自己評価の低い人のように見えます。自己評価というのは、第三者に自分はどう見られているかを、自分がどう気にするかです。また、気にするかしないかは「自意識」の問題でもあり、その意味では徴税人の人もまた、世間からの評価を気にするあまり、自意識（＝自己否定）に苦しんでいたと考えられます。イエス様が手を差しのべられたのは、そういう負の心の環境におかれた人たちでした。

他方、もし自分がその場に居合わせたらと考えると、その徴税人には「そんなことはありません。あなたがお役目を果たしてくれているお陰で、みんな助かっています」と、むしろそう言うでしょう。けれども、そうはいっても彼は依然として、社会や周囲からの視線を気にしてばかりいるとします。その場合、そのような彼の姿は、ともすれば自己評価にとらわれる現代人の姿とも重ね合わせることはできないでしょうか。というのも、現代もまた「評価」が社会の中心であり、そうした他人の視線がストレスとなる点では、いずれも似ているからです。イエスのみことばは、そういった私たちの心理に一石を投じるものでした。

今は教会は神学的な勉強や研究に熱心で、もちろんそれも大事ですが、案外、人としての教育は見過ごされがちかも知れません。なぜなら、キリストの教えは、人間教育の観点からも非常に示唆的であり、それはたんに、むずかしいことを言えばいいということではなく、人の心の苦しみや自分を肯定できない生きづらさを和らげるのに、キリスト教の精神が果たすことのできる役割は、決して小さくはないと思うからです。そうした気づきを今後の研修活動においても深めていきたいもの です。

研修委員会

10･12の教会樹木剪定作業の報告

冬の季節の到来を前に、教会の樹木には剪定が11月12日（火）に行われました。樹木自身は翌春に向けて乾燥と寒さから自らを防備し、わたしたちは樹木との共存を願って過度な成長（高木になると人の手が届かなくなり、折れた枝葉が屋根の雨樋を詰まらす）を抑制するための剪定です。予定した10月29日が雨で2週間延期された当日は晴天で気温は20度、野外の労働が爽快でした。

池田市シルバー･センターの職人さん3名が高木の枝切りと低木の枝透かしを行い、残った枝々に芽を出す葉に満遍なく光と二酸化炭素が当たるよう鋏を使って、樹木間や各樹木の枝間、聖堂やカール記念館、司祭館などの建物との調和を図りました。高木上の作業は長くて慎重な作業時間が要求され、剪定された枝葉も多いので、低木化を行って、中庭に歩行路やベンチを設置して、観られる庭から人と植物、像との共存する庭に換えるプランが作られるのを期待します。

地球の歴史において、28億年前に浜辺に生まれた光合成細菌が生物の栄養物になる糖とO_2（光合成産物）を作り出し、大気中のO_2を増やしCO_2を減少するという陸上環境の大変革が始まりました。栄養物を自家合成する光合成細菌を共生させた宿主である緑色植物が陸地に繁茂し、その植物などを食して、植物の種を運ぶ動物が海辺から陸地に移動し始めました。それから20億年という長い時間が経って、現在のような地球環境になったのには10億年前ごろのことです。その地球環境を19世紀末からの百年足らずの間に人類は大量生産方式の工場生産などを行って徐々に大気の組成と生き物間の関係性を換え始め、大気温度が上昇し始めました。その地球気候変動を危機と捉えられている現在、その様な地球環境の変化の影響を受けやすいのに簡単に移住ができない弱者を無視していることになると現フランシスコ教皇様も回勅ラウダート･シで指摘されています。少なくとも、人類による地球環境の短時間の変化に驚き、右往左往する人々を含む小動物や植物の姿に眼を閉ざすことなく、周囲環境との関係性を築きたいと思います。

教会樹木の枝葉が職人さんによって剪定され、落ちた大枝を短くして50㌔と90㌔のビニール袋に詰めているのは私たちです。50袋と太めの枝をビニール紐で束ねたのを仮置き場の信徒会館の北側に運ぶのは短距離ながら力が要ります。

東側の公道側にある3人の職人さんたちによって電動バリカンで切られたカイズカイブキの垣根の枝葉は水分を多く含むので類焼を防止するのでその垣根は重用されています。その枝葉が詰められた袋は重いのですが、収集車停車地までの距離は短いので何とか運べました。

今回は職人さんによる剪定が順調に進み、司祭館の南面にある一株のゴガネモチにも剪定が入りました。ゴガネモチは半年の間に1.5mほどの新枝がその真ん中で1cmの太さを越す程に成長しています。その剪定された長い枝を小さく切って袋に詰めると、6袋になるほどです。この過大な成長力に対応するには非力な複数の老人が剪定と袋詰めを行うと3時間程かかり、今回の袋詰めだけでも2時間でした。この持てあます成長力のあるコガネモチを伐木し、成長力がほどほどで高さが3m程度の樹木を中庭から移植して、司祭館の2階からの眺めを維持できないかと思案しました。

職人さんたちから伐木をすすめられたは中庭のクスノキです。理由は、幹から出た古枝が弱くなっていて、その枝の先端や別れた枝の剪定を慎重にせざるを得なかったとのことです。

剪定後の袋詰めに参加したのはノノイ神父をはじめとして男性が6名、女性（炊事担当も含む）が11名と参加者数は昨年の数をほぼ維持しましたが、それでも昨年より30分遅くまで作業が続きました。週日に勤務のない信徒にとって美味しい昼食と終了後の談笑は大きな楽しみです。来年も参加できるのを祈って散会しました。

樹木剪定の日の世話人

みんなの談話室

「十字架の使徒」を読む

Y.N.

かねてから気になっていた、ウォード･ビドル神父様の著書「十字架の使徒」を読んだ。もっと前にこの本を読んでいれば、生前のウォード神父様にいろいろと質問をしたり、お話を直接伺うこともできたかもしれないのに、と悔やまれるが、これも私に与えられた出会いなのだろう。当時、私はニコニコと信徒に笑いかけるウォード神父様を遠目に見ていただけだったのだ。出版物の形で残された唯一の著書、「十字架の使徒」(佐伯岩夫訳･あかし書房　1979年出版)は、ウォード神父様のすぐれた構成力と洞察力に、巧みな翻訳とが相まって、私でも容易に読み進むことができた。

十字架の使徒とは、むろんのこと、御受難会修道院の創立者、十字架の聖パウロのことである。これまで、十字架の聖パウロについては、若いころから御受難修道会の設立に執念に近いほどの信念を持っておられたお方であることぐらいしか知らず、ちょっと近づきがたいような怖いお顔のイメージが浮かぶのみだった。

ウォード神父様は十字架の聖パウロが、パウロ･ダネオとして1694年に北イタリアの町で生まれたときから、1775年に81歳で亡くなるまでの生涯を追いながら、その霊的至福や葛藤、困難に満ちた人生、御受難修道会の成立、ひいては日本への宣教に至るまでを広い視野に立って語りつくされる。まえがきで、日本について、「福音の宣教は、この国では特に難しい」と率直に認めつつも、十字架にかかられたイエス･キリストの愛を黙想すること、さらには人々を受難の黙想へ招き入れることが御受難会の存在理由であると明言されている。

パウロ･ダネオは20歳のとき、十字架上のキリストからの熱烈なる愛を痛切に感じて、「回心」し、すぐさま修道会を創設する決心を固めたのだった。会則も修道服もバッジも早々と決めた。しかし神はそんなに簡単には望みを叶えてはくださらなかった。教皇により修道会の会則が認められたのは、47歳のとき、正式に修道会としての認可が下りるまでにはさらに長い道のりが必要で、なんと75歳のときだったのである。その長い年月の間、ゴッホの弟テオのごとく寄り添う弟に支えられながら、たくさんの個人的な手紙を送って御受難の愛を説き、集まってくる求道者と黙想の生活をともにし、黙想会を催して人々に御受難の説教をし続けた。ウォード神父様のご生涯と重ね合わせて考えると、ウォード神父様はまさに御受難会司祭として宣教の王道を歩まれたのだな、と合点した。聡明で人間的魅力もあるウォード神父様が、売布の森でひっそりと黙想生活を送っておられたのは、あえて言うならば、宝の持ち腐れのような気がしていたものだが、実は修道者としての道をまっとうしておられたのだった。

末尾に付録として十字架の聖パウロ自身が記した霊的日記が添えられている。それは荒れ野でイエスが黙想したように、40日間の黙想生活を送った26歳のときに記したものである。そこにはご聖体を受けて歓喜する心と、何も感じられなくなって苦悩する心とが赤裸々につづられていて、感動を覚えずにはいられない。確固たる信仰を持ちながらも、雑念や食欲に捕らわれてもがき苦しむ十字架の聖パウロに、親しみを感じ、少し近づけたような気がした。

キリストの御受難こそが福音のかなめであると教えてくださったウォード神父様、十字架の聖パウロについてあますことなく語ってくださった天国のウォード神父様に感謝を捧げる。

短歌

秋の陽を古き駅舎に浴びをれば
あけびの色の嵐電が来る

紅葉を夜に照らしてゐしライト
いま青天を仰ぐさびしさ

パウロ

新たにゆるしの秘跡が１２月に

12月1日（日）と22日（日）のミサ後、ノノイ神父様により許しの秘跡が受けられます。

11月24日の黙想会後、矢野吉久神父様により施される赦しの秘跡のほかに、日時が追加されました。

研修委員会

宝塚黙想の家から黙想会のお知らせ

■　日帰り黙想会
12月19日（木）10:00～15:30
指導：山内十東神父
12月20日（金）10:00～15:30
指導：山内十東神父

■　週末黙想会
12月はありません。

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。　☎0797（84）3111

年間カレンダーに追加・変更された行事予定

12月1、22日（日）ミサ後
ゆるしの秘跡
12月5、12、19日（木）　10:30～
聖書百週間
12月13日（金）　14:00～16:00
福音書を学ぶ会
12月28日（土）「からしだね」1月号発行

広報委員会からのお知らせ

「からしだね」1月号の発行日を本年度当初の予定より一週間後ろに送らせて、12月28日とします。原稿締め切りは24日です。

それにより、降誕祭関係の記事が2月号にまたがらず、まとめて1月号に掲載できます。なお、通常の原稿締め切り日は評議会の1週間後ですが、遅れる場合は、投稿予定の文章のおよその量をあらかじめお教えくださると、たいへん助かります。

皆様から「からしだね」1月号へ多くのご投稿が届くのをお待ちしております。

編　集　後　記

好天による穏やかな日光が洗濯物を乾かしてくれる時、主の愛を感じる。主婦目線のようだが、暖かいその光を眺めているとそう思わずにはいられないのだ。平成から令和へと変わりゆく中でもただ変わらないのは穏やかな日光のような主の愛だと思う。しかし、今年はいくつかの巨大な台風が甚大な被害をもたらし、尊い人命を奪う事も続いた。理不尽な事件や事故も多い。私たち人間が作り出した便利なものは、私たち自身を苦しめているのかも知れない。私たち人間が考える優劣は何の意味も成さない。そんな風に、庭に生まれ光に伸びる草を眺めながら感じた。

Ana